

# ようしゅうはっかい 揚州八怪

2021年6月12日(土)—8月15日(日)

[前期] 6月12日(土)—7月11日(日) / [後期] 7月13日(火)—8月15日(日)

中国最大の河川である長江の下流・揚子江。その北岸に栄えた揚州は、古くから水運交通の要衝であり、国際的な商業都市として華やぎ、文化人の往来する香り高い風流の地でした。唐代の高僧・鑑真(688-763)の故郷としても、わたしたち日本人に親しみの深い都市です。本展では、清時代18世紀を中心に、この都市を舞台として活躍した「揚州八怪」と呼ばれる一群の書画家に焦点を当てます。

清朝は康熙・雍正・乾隆三帝の治世に最盛期を迎え、このころ揚州の経済活況は天下にとどろき、巨富を築いた塩商が支援者となって文化サロンが数多く形成されました。文士墨客がさかんに往来し、ここに現れたのが金農(1687-1763)や鄭燮(1693-1765)ら「揚州八怪」でした。揚州八怪とは、揚州を舞台に優れた

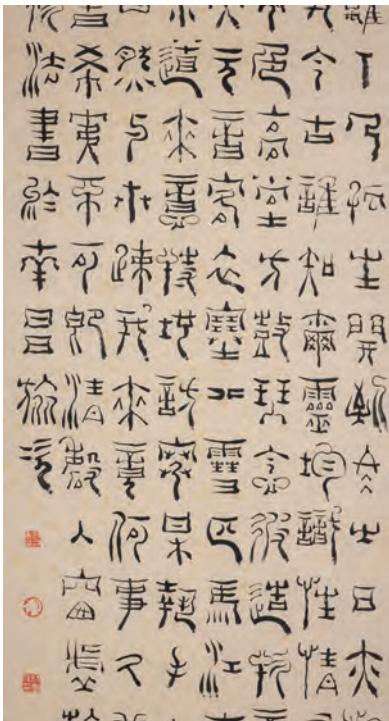
才能を発揮した“8人”的書画家の呼称です。「怪」とは人並はずれていることをほめる意味で使われています。なお後世の評論家がこの8人を選ぶとき、人によって多少の違いがあったため、揚州八怪にかぞえられた者は総じて15人います。彼らはみな教養深く詩書画に通じ、伝統的な規矩に囚われず、自由な表現によって芸苑に新風を吹き込みました。

このたび、中国屈指の収蔵を誇る上海博物館の協力を得て35件を借用し、日本国内の作品とあわせて約100点を展観して揚州八怪の全容に迫ります。中国書画の伝統を近代まで切り開いた、先進的な彼らの芸術の魅力を存分にお楽しみいただきたいと思います。

(森橋なつみ)



1



2



3



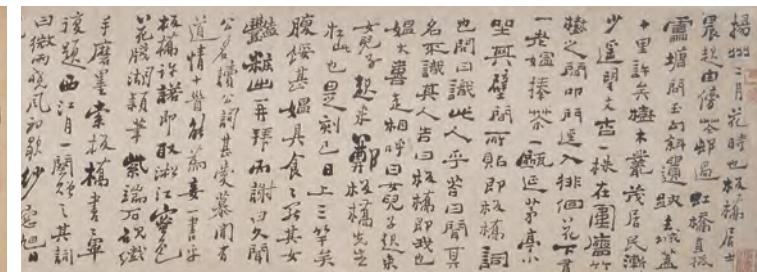
4



5



6



7

1 李方庸《風竹図》 上海博物館

2 楊法《篆書詩》(部分) 上海博物館

3 黃慎《仙子漁者図》 大阪市立美術館

4 高鳳翰《山水人物冊》うち一面 大阪市立美術館

5 金農《山水人物冊》うち一面 上海博物館

6 辻寿民《花卉八頁巻》(部分) 上海博物館

7 鄭燮《行書揚州雜記》(部分) 上海博物館